

ホームスクーリング Home Schooling

子どもは大事
ホームスクーリング 2007

○ホームスクーリングの背景

ホームスクーリングは、保護者(親)が、子どもを学校にやらずに、家で教育する方法である。アメリカ等、多くの国で盛んになっている。

日本では、法律的にホームスクーリングは認められていない。保護者(親)が、子どもを小中学校に通わせるのは義務であり、就学が免除されるのは、「病弱等やむ得ない理由」の場合だけである⁽¹⁾。

学校は、教員免許状を持った教育の専門家である教師が専門的で広い視野から子どもを教育する場であり、子どもの能力を伸ばし、公共性を担う社会人としての資質を養うのに最もふさわしい場と考えられている。

しかし、ライマー(1985)やイリッチ(1957)など脱学校論者の指摘を待たずともなく⁽²⁾、現代の日本では、学校教育に様々な問題が生じるようになっている。親の高学歴化、家族の教育家族化にともない、親が教育の主導権をにぎり、子どもの教育を学校や教師に依存しない傾向が強まっている。また不登校が増加し、子どもの学校離れ、教師の権威の喪失が続いている。そのような中で、家庭で親が子どもを教育するホームスクーリングも、注目されるようになってきている。

○アメリカのホームスクーリング⁽³⁾

ホームスクーリングが最も盛んなのは、アメリカ(USA)である。アメリカにおいてホームスクーリングは親の就学義務の放棄としてみなされているわけではない。正当な就学のひとつとして各州政府が認めている。その認め方が州により異なっており、年々その法律はホームスクーリングに有利な方向に変わっている。アメリカでは、現在各州は、一定の年齢の子の就学を義務づけているが、子どもを家庭で教えるホームスクールについて、さまざまな条件をつけて認める州が多い。最も規定が緩い州では公立学校と同じ基本科目を同じ時間教えたことを証明するものを毎年提出すればよい。それに毎年標準テストが加わる州もある。親の教授資格(教員免許、学歴)も重要な要件である。ホームスクーリングを私立学校として認可する州もある。

ホームスクーリングで学ぶ子どもの数は把握が難しい。アメリカで1970年代1万~2万人、1988年には13万~30万人、現在は200万人に達すると言われている⁽³⁾。カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどでも見られる。

アメリカの親はなぜ子どもをホームスクーリングで育てたいと思ったのか。メイベリー(Mayberry)の調査では、「宗教的信念」(65%)、「成績のため」(22%)、「社会的発達のため」(11%)、「その他」(2%)となっている⁽⁴⁾。

親がホームスクールで子どもを教育しようと親が思うきっかけの第1は、宗教的理由である。ホームスクーラーには、キリスト教原理主義の人が多く、進化論を教える学校には、子どもの教育を任せられないと考えている。キリスト教団体が、聖書の教えに則った教科書を多く発行しており、それを使用し、親の宗教的信念をホームスクーリングで子どもに伝達している。

(1) 「国民は、その保護する子に、別に法律に定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う」(教育基本法第5条)。「保護者は子に9年の普通教育を受けさせる義務がある」(学校教育法16条)。就学が免除されるのは、「病弱等やむ得ない理由」の場合である(学校基本法18条)。

(2) 学校批判、脱学校論に関しては、下記を参照。

ライマー、E.(=1985、松居弘道訳)『学校は死んでいる』晶文社

イリッチ、I.(=1957、東洋・小澤周三訳)『脱学校論』東京創元社

(3) アメリカのホームスクーリングに関しては、下記を参照。Wade,T.and other,1995,『The Home School Manual』,Gazell P.本図愛実,1995,「ホームスクーリングによる学校教育への問題提起」『学校と社会の連携を求めるアメリカの挑戦』教育開発研究所

武内清,1998,「ホームスクーリングから見た地域社会学校」『新・地域社会学校論』ぎょうせい

宮井勢都子,1999,「多文化社会のアメリカにおけるホームスクーリング運動」『東洋学園大学紀要第7号』

(4) メイベリー、M.ほか(=1997、秦明夫ほか訳)『ホームスクールの時代』東信堂

第2の理由は、教育的なものである。教師は優秀とは限らないし、学校は無駄な時間が多い。家庭の方が、親の監督のもと無駄な時間を省き、純粹に勉強に打ち込める時間が多い。さらに、子どもたちは、学校で暴力、セックス、麻薬などに巻き込まれ、身の危険に晒されることも多い。健全な社会的発達は家庭の方が有利である。

ホームスクールをする親の社会的属性には、一定の傾向がある。白人、既婚、若い家族(30歳代)、高学歴、専門・管理職、中流階層(年収による)、宗教的関与が高い、政治的には保守的な層に多いことも明らかになっている。彼らは、1990年代に公立学校に浸透した多文化主義に対して反対を表明することも多い。

○教育方法、教育効果

ホームスクーリングにおける教育方法はさまざまである。母親が教育を担当し、自分の子どもだけを担当する場合が多い。ホームスクーリングの教師は、片手間ではできない。テキスト、教材、勉強時間、教育方法、評価など子どもの勉強にかかわることを、すべて決めて、毎日24時間、子どもに教師としてかかわる。家に閉じこもらず、地域の子どもや大人交わる機会を多く持つ。他のホームスクール、教会、学校、図書館、教材組織といった地域社会の資源をフルに利用する。学校のクラブ活動や特定の授業に参加する場合もある。

ホームスクーリングの教育効果を危惧する声もある。教育の専門家でない親に教えられて学力はつくのか、学級に属さないので集団意識が育たない、遊ぶ友だちもなく社会性は発達するのかといったことが心配される。これに関しては、伝統的な学校の生徒と比較して学力も社会性も問題ないという調査結果が多く出ている。

○ホームスクーリングの意義

ホームスクーリングは、学校に代わる教育方法として日本では認められていない。しかし、教育する家族や不登校生徒の増加するなか、学校教育のあり方を問い直し、それに替わるものを模索する手掛かりになる。

永年ホームスクーリングに関わってきたL.ドブソン(Dobson)は、「子どもはひとり一人違うということ」と「学校のスケジュールやカリキュラムが唯一の方法ではないということ」をホームスクールの重要なコンセプトとしてあげている⁽⁵⁾。

ホームスクーリングの考え方は、学校へ行くのが当たり前としてきた近代の教育観に再考を促す。それはまた、不登校の子どもやその親から学校へ行かないことの罪悪感を取り除く。自明視されていた学校教育のあり方を問い直し、地域社会と結びついた多様な学びの形態のあることに気付かせてくれる⁽⁶⁾。

一方、社会性、公共性を持つかどうかとも問われよう。親の教育放棄にホームスクーリングが使われたり、偏った宗教観や価値観の持ち主の親がホームスクーリングで子どもを教育すると、子どもに人権が無視され、社会性や公共性を損なわれる場合もある。(武内 清)

(5) ドブソン・L. (=2006, 遠藤公美訳)『ホームスクーリングに学ぶ』緑風出版

(6) 吉井健治, 2000, 「日本におけるホームスクールの可能性と課題」社会関係研究 第6巻。

上杉孝實, 2009, 「ホームスクーリング」『最新教育キーワード 第13版』時事通信社。